

# 随 想



## 太郎月一日

星 永 文 夫

年改まる一月、またの名を八太郎月Vという。初めて生まれた男子に太郎と名づけるように、初めての月にもまたその名をつけて呼ぶ、ゆかしいならわしによるものであらう。ちなみに、十二月は

八弟月V。これも同じたぐいで、かつては月を人になぞらえるほど、人は時とあつい交流を持っていたと思われる。

しかし、時間が分秒で売り買いされる時代になると、時と人との交流も疎遠になつて人格化されることもなく、数詞だけが残つて、八太郎月V八弟月Vの呼称は消えてしまった。ただ例外として八師走Vの呼称が残っているけれど、これには何かを求めて八師走Vというさもしイイメージがくつつけられ、それで余命をつないでいるといった感が強い。

ところで、戦後三十五年の努力は、毎日祭りを正月にする作戦に成功したようである。お陰でかつてならば祭りの日にしか食えないような御馳走を、人は毎日食えるようになったし、正月の晴着のようなものを、いつも身につけることができるようになった。が、それとひきかえに、八晴れの日Vの感激はおおた薄れて、ことの始めと終りの節目もさだかでなくなつてしまつたが八海老飾るVといえはかつては新年の季語であつたが八毎日が正月Vの昨今は海老は年中食卓を飾り、床の間をこれもまた年中菊が飾つて、シュン(旬)というものがなくなつた。したがつて、年月にけじめをつける正月が来ても、ことさらに改まるという感覚はうすく、まして「もういくつ寝る

とお正月」と指折り数えて正月を待つということはなくなつた。

もつとも、正月を指折り数えて待つことがなくても、ことさらに正月改まることになつても、八毎日が正月Vになつたこととはめでたく、八太郎月Vが消えたためいきつくにはあたるまい。時が金に換えられる時代だから蓄積もできて、その分だけ暮しも豊かになつたのだから、誰に文句のつけようもない。せいぜい豊かな暮しをことほいで、どこをまわしても同じテレビの正月番組に、小さい欠伸をかみころしながら、ながながつきあうが結構というものだらう。

けれどもやはり、その八結構Vに我慢できないというものは、その場を立つて八毎日が正月Vを返上し、襟を正すがよい。その姿勢で、自らの内に八何かが終り、何かが今始まるVものを見つづけるがよい。年のはじめの、それが八初仕事Vで、八今始まる太郎Vを育てることが今年の事業となるはずだから。

そう自らに言いよかせて、ばくも今コタツを立つ。そして机に向かい、まっさらの日記に今年の夢をかきつづる。わが八太郎Vが、三日坊主にならぬことを祈りながら。

(一月記す)

(俳人)

# 旅

中 村 雅 子

ひたすら書の道に明け暮れている夫の手助けがあるし、自分自身も書の道で成長が出来れば……と長い教職を離れてからもう五年目の春がやって来る。三食昼寝つきで結構ですわ、と皆様よくおっしゃるけれど、どうしてどうして、主婦兼秘書兼弟子の指導兼……と体が五つ位欲しい毎日なのである。

そんな中で何とか寸暇を見つけては旅に出る。一人旅もあれば夫と一緒の時もある。行先も様々、日本の片田舎もあれば、遠いよその国のこともある。仕事を忘れ家事を忘れ、胸にかかる様々な事も忘れ精一杯旅を楽しむ。

美しい風物も美味しい食物もさる事ながら行く先々で出会う人々とのふれ合い、頂いた親切が何時までも私の心の土産として残る。

数年前の夏、気のおけない友人とのヨーロッパの旅のこと。午前中自由時間を幸に、パリの印象派美術館を訪ねた。

マロニエの茂る木陰のベンチで開館を待っている人々にまじって腰をおろした。「ボンジュール」隣の少年に危つかしい挨拶を交わし尋ると、マドリッドから絵を見に来た高校生だという。古い布製の袋を肩に質素な身なりである。身ぶり手ぶりのお喋りですっかり仲良くなりお互

にカメラを向け合ったが彼のカメラは蛇腹のついた懐かしい品物である。「僕のはよく撮れないかも知れない」と彼はハニカンだ。後日彼から写真が届いた。マドリッドの町の噴水の前のもので、あの折りのスナップは無かった。

館内でモネ・マネ・ルノアール・セザンヌと次々の名画にキモをつぶし我を忘れて見入っていると、耳許に小さい声かして「次に行きますサヨナラ」とあの少年である。館内は沢山の観客なのに物音一つなくしんとしている。私達は目と手でサヨナラをした。

人に迷惑をかけない、美術館などでのマナーのあり方、彼等は小さい頃から家庭で厳しく躾けられているのだから。

旅先で受けた親切といえは——パリで夜、道に迷った私達をホテルそばの六つ角まで送って、入口に着くのを見守って下すった行きずりの老紳士。スイスのジュネーブでは置き忘れたコートをシャモニーまで車で届けて下すったホテ

ルの方。(何時間もの道のりをと友人は自分のうっかりを恐縮して小さくなつていたけれども)上海の小さい食品店でクルミを買ったらザルをゆすって無傷のクルミを手で探って紙袋に入れてくれたおじいさん、数えあげると枚挙にいとまがない。そんな時旅に出てよかつた、しみじみ思うのである。

反面旅先で身の縮む思いのすることも屢々である。アルプスの登山電車の駅の真白い壁にあった日本文字の落書、先を争って人魚姫の銅像によじ登って写真を撮る日本の若者達、見ている私達が冷汗三斗である。

旅に出てよい思い出を豊かにすると共に、私も又よい思い出を人様に残して来ればと願いながら、又次の機会を楽しみに忙しく走り廻っている私である。

(書家)

## 心の小徑

郡 山 駿 一

私事で恐縮だが、わが社で企画製作しているもの一つにタウン誌がある。

暮らして生きる情報とアドバイスを

願つて、クリーニングのS社の営業の人達がお得意さんの家庭へ、奥様へ、毎月丹念に手渡ししているタブロイド版の月刊誌だ。

その数は二万三千部に及んでいるが、私は一言で言えば人間臭い編集を主軸としてやってきた。商品のコマシヤルも勿論載せてはいるが、それもその商品と人間のかかわりに力点を置いている。

八商品を売らなくて暮らしと文化を売ろうVという多くの一流会社のご賛同のもとに、この2月で43号を迎える。歳月という三年半という勘定だ。

人間臭いこと——従つてできるだけ多くの方に登場頂き、それぞれの生き方や暮らしのあり方、考え方を述べて頂く——ということで、今迄にお忙しいお時間をさいて頂いた方の数は三百人に及ぼんとしている。

例えば八ご夫婦訪問Vでは知事さんにもご登場頂いた。知事さんは「馬車に乗って来たお嫁さんを迎えて、庭にゴザを敷いて記念写真を撮った。まるで田舎芝居のようだったが……」と三十年前のその頃を語り、大切なとおきの結婚写真の掲載を許して頂いた。

また八親と子の対話Vのページで、ある父親は、自分の反対を押し切つて、遠く信州へ嫁ぐ娘に「雪の中を転びまらびつ人生を切り拓け」とそれでも励ます。八うちのご亭主Vと名づけた欄で、ヤキ

トリ屋の奥さんは「月給八千円で親子五人暮らしていた」昔を語り、「やっぱりトーチャンについてきてよかつた。今は幸せ」と手ばなしでノロケル……。

いろいろな階層の人が、てらいなくわが人生を語り、自分の生き方を述べる。

さまざま暮らし、さまざま人生航路とその処し方のあれこれ……読者はその行間ににじむなにかを汲みとつて頂いているに違いない。とくに身近かな人や知っている人であればその度合いは一段と強いのではないだろうか。地域の共感や連帯は、そんなところから生まれてくるのではないだろうか。

その証拠に、ご登場頂いた殆どの方が「あちこちから読んで」と言われたり、久しく疎遠の人から「懐かしい」と電話を買つたりする」と告げられる。

とっても嬉しい!

八〇年代は、物の時代でなしに心の時代だと言われている。また地方の時代とも。私たちがつくっている「タウン誌」はささやかな小さな媒体でしかないが、それが、地方に住む私達の心の交流を果す役目を少しでも果しているのかと思うと、やはり、なんだかとても嬉しい思いにさせられる。

ご登場頂く方の数は今後ますますふえ続けることだらう。

(興マインド・社長)